

# 詠郭璞墓詩小考

關 清 孝

## 目次

- (1) はじめに
  - (2) 「郭璞墓」は本當に郭璞の墓なのか
  - (3) 詩に詠まれた「郭璞墓」について
  - (4) 宋末以降の「郭璞墓」を詠んだ詩について
  - (5) おわりに
- (1) はじめに

西晉から東晉にかけて活躍した郭璞は、多くの逸話を持つことで知られる。多くの逸話を残しているということ、後世多くの人々によってその人物が語られたことを示している。それらに語られる郭璞の姿については、大平幸代「郭璞」説話の形成<sup>①</sup>や牧尾良海「風水思想小考―郭璞とその前後」<sup>②</sup>などの論考がすでに成果をあげている。しかし、

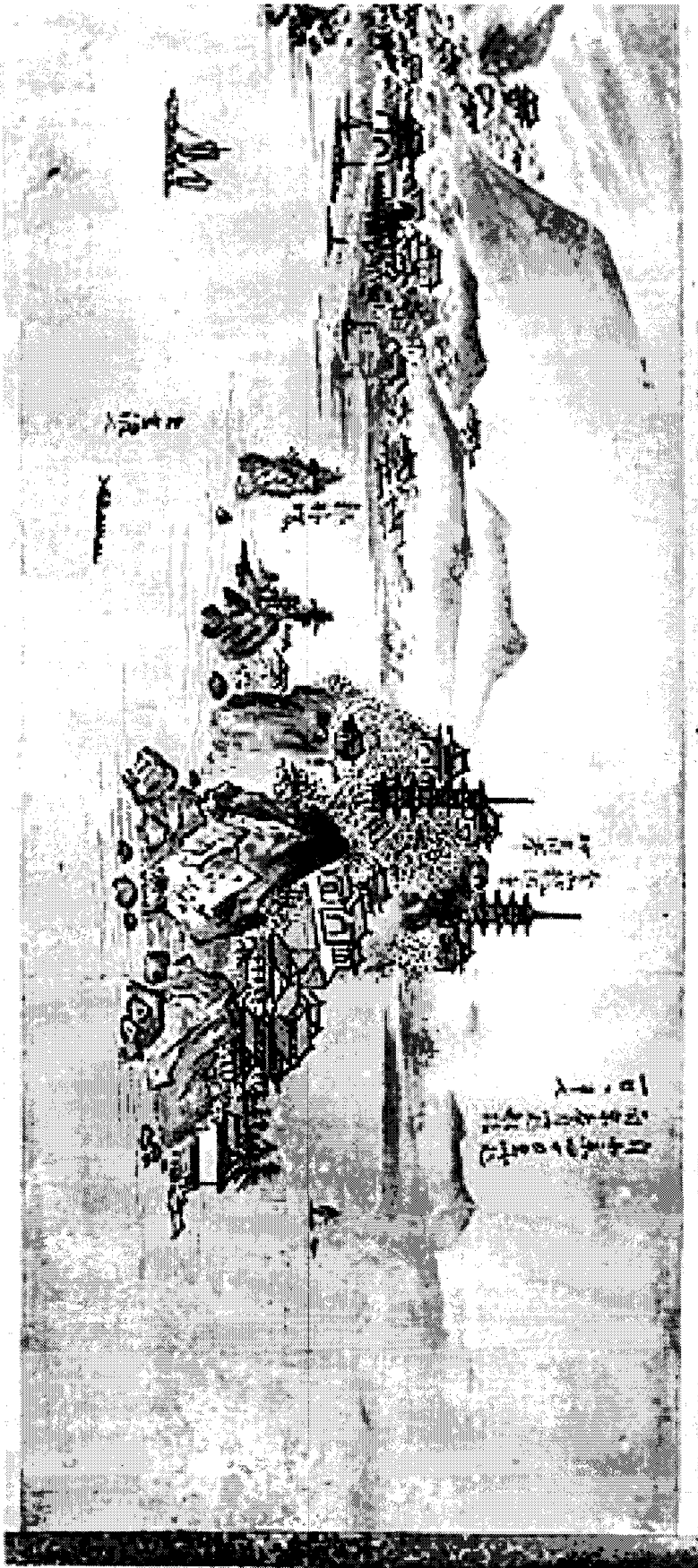
これらの論考は説話で語られた「郭璞」の姿を対象にしたものである。そこで小論では、説話ではなく詩に詠まれた郭璞の姿に注目をして考察を行う。その上で、看過することができないのが、「郭璞墓」が詩に詠まれていることである。なぜならば、詩において「郭璞」を詠む際には、その多くが「郭璞墓」を詠んでいるからである。

郭璞の墓は江蘇省鎮江市に現存する<sup>3)</sup>。現在では畑の中にそびえ立つ巨石であるが、清の同治年間までは隣接する金山寺とともに長江の流れの中にある島であったという。その姿は雪舟の筆によると伝えられている「唐土勝景圖卷」(「圖1」)によってうかがい知ることができる。圖の中央やや左にぽつんと描かれている岩のようなものが郭璞の墓である。長江の流れの中にあった郭璞の墓、そして、それを詩に詠む、そこにはどのような意味があるのか。小論では郭璞の墓を詠んだ詩が一時的なものではなく、時代を超えて詠まれ続けたという點に注目し、詩に詠まれた「郭璞墓」には本當に郭璞が葬られているのか、という視點ではなく、これらの作品羣が「郭璞墓」とされる塚をどのように受け止め詩に詠んだのか、という觀點から論じてみたい。

## (2) 「郭璞墓」は本當に郭璞の墓なのか

詩に詠まれた「郭璞墓」を見ていく前に、郭璞の墓とされる塚に関する議論を一度まとめておこう。この塚が郭璞の墓であるとする最古の記録は、管見の限りにおいては陸游『入蜀記』の次の文章である。

因つて雄跨閣に登り、二島を觀る。左を鵲山と曰ふ。舊栖鵲有りと傳ふるも、今は有る無し。右を雲根島と曰ふ。皆特起して山に附せず、俗に之を郭璞墓と謂ふ<sup>4)</sup>。



【圖 1】傳雪舟筆唐土勝景圖卷（京都國立博物館藏、部分）

陸游が金山寺の樓閣から見える島を「郭璞の墓と言われている」と記していることから、南宋の頃には金山寺の脇にある島が郭璞の墓であるとされていたようである。しかし、なぜこの島が郭璞の墓であるかについては記されていない。その理由については、多くの文献では次に引用する『晉書』郭璞傳と『世說新語』の文章が理由としてあげられている。『晉書』郭璞傳の文章は、次の通りである。

璞母の憂を以て職を去り、葬地を暨陽きやうに卜す。水を去ること百歩許ばかり。人水に近きを以て言を爲す。璞曰く「當に即ち陸と爲るべし」と。其の後、沙漲みなぎり、墓を去ること數十里皆桑田と爲る。<sup>(5)</sup>

郭璞が母親の埋葬地を占いによって決めたところ、そこは川の近くであった。それを知った人が川に近いことを指摘すると、郭璞は「陸地になるから大丈夫だ」と答えた。すると、後に川邊の砂地がみるみる廣がり、墓から數キロメートル先まで桑畑になった、という話である。また、『世說新語』にもほぼ同じ文章がみられる。<sup>(6)</sup> いわば、郭璞が占いによって決めた葬地が水邊であったことを理由として、川の中にある岩を郭璞の墓としているのである。しかし、この理由だけで江中の岩を郭璞の墓であるとするのは不十分であると言わざるをえない。そうであるにも拘わらず、ほとんどの文献は金山寺の脇にある江中の岩を郭璞の墓とする理由をここに求めている。

このことについては當然疑義があがる。たとえば、明の楊慎は『丹鉛餘錄』で「郭璞地理に精しく、凡そ吉穴に遇へば、爪髪を剪り、以て之に瘞む。故に郭璞の墓の在る所は、多く然ること有るも、其れ何れに據るか知らず」と、なぜかの地が郭璞の墓になりうるのか根拠が不十分であることを指摘している。このような駁論はいくつも見られるが、その最たるものは顧炎武『日知錄』である。顧炎武は『晉書』郭璞傳と金山寺の脇にある岩を郭璞の墓であるとしてい

る王惲の説を引用した後で、次のように論じている。

按ずるに史文は元と「水を去ること百歩許り」と謂ふ。大江の中に在らず。且つ當時は既已に沙は漲り田と爲る。而も暨陽は今の江陰縣界に在りて、京口に在らず。又た葬る所の者は璞の母なりて璞に非ざるなり。世の傳ふる所は皆な誤れり。<sup>(8)</sup>

このように批判しているが、顧炎武の批判する所は次の四點である。

- ① 『晉書』で墓にしたのは陸地であり、長江の中とは書いてないこと
- ② 『晉書』の段階で、墓の周りが桑田になっていること
- ③ 暨陽は京口（鎮江）ではないこと
- ④ 墓に埋葬されたのは郭璞の母親であつて、郭璞本人ではないこと

以上の理由から、金山寺の脇にある江中の岩は郭璞の墓ではないとしている。このように、鎮江の金山寺の脇に郭璞の墓とされる塚があること、しかし、郭璞がそこに埋葬されているか否かは疑いがあること、ということを見てきた。

さて、郭璞の墓とされている所は、鎮江以外にも存在する。以下ではそのいくつかを確認しよう。まず第一に「南京にある玄武湖」とする説である。宋の張敦頤『六朝事迹編類』には「眞武湖中大墩里有。俗に相傳して郭璞墓と曰ふ」とあり、現在の南京の玄武湖に郭璞の墓と傳えられるものがあることを記している。この玄武湖に郭璞の墓があると

する説は、他にも『大清一統志』に「郭璞墓「上元縣の北に在り。後湖中に大墩有りて、俗に傳へて璞の墓と爲す」<sup>(9)</sup>とあることや、鄭方坤『全閩詩話』<sup>(10)</sup>にも見られる。

つぎに『太平御覽』に引用されている『南徐州記』には「馬鞍山の東に黄山有り。郭璞の葬むらるる所」<sup>(11)</sup>と、馬鞍山の東にある黄山が郭璞の墓とされており、鎮江や南京以外にも郭璞の墓とされる場所があったことが確認できる。

このように、郭璞の墓とされる場所は一箇所ではない。すべて長江流域の地であるという共通点はあるものの、いづれを正解と定めることはできない。あくまで傳説の域を出ていないからである。また、重要なことは詩に詠まれた郭璞の墓は鎮江の金山寺の脇にある塚だけである、ということである。そして、筆者が求めているのは、郭璞の墓とされる所に本當に郭璞が葬られているかということではない。「郭璞墓」を題材とした詩、つまり、詩を詠んだ當時の知識人が、「郭璞墓」という言葉にどのようなイメージを與えていたか、持っていたかということである。

### (3) 詩に詠まれた「郭璞墓」について

以下で「郭璞墓」を詠んだ詩を具體的に見ていくが、まずはいつ頃から郭璞の墓が詩に登場するのかということを確認したい。そこで、金山寺のまつわる記事を集めた『金山志』<sup>(12)</sup>を中心にして、「郭璞墓」が詠まれた詩、および「郭璞墓」と題する詩を集めて次の「表1」で一覽にした。この表から確認できるように、「郭璞墓」が詩に詠まれるようになったのは、北宋の黃庭堅以降である。なぜ、宋からなのか、ということについては二宮俊博「詩人の墓——中晚唐期における前代の詩人評價に關して——」<sup>(13)</sup>が、中唐以降とりわけ晚唐五代において前代の詩人の墓が詠じられるようになった、と述べていることから推測できよう。二宮氏の説に依據すれば、晚唐五代に詩人の墓が詩に詠まれるようになり、

[表1]

時代	北宋	南宋	元	明	清
作者	黃庭堅 張蘊	揚萬里 劉克莊 文天祥	王恂	程敏政 沈周 中心叟 施峻 史鑑 夏良勝 楊慎	茅元軫 葛中柱 顧敬恂
タイトル	金山懷古 金山	金山行 郭璞墓 謀人難	過郭璞墓	郭璞墓 郭璞墓 弔郭璞墓 郭璞墓 郭璞墓 郭璞墓 郭璞墓	題郭公墓 遊金山 郭璞墓
使用例	笑看郭璞噴前水 激石淘沙幾日休 八十老僧相引說 潮痕不上郭公墳	最愛簷前絕竒處 江心巉然景純墓 當時若也私謀泄 春夢悠悠郭璞墳	一死祗緣撩虎尾 孤墳何故葬江心 落日江心墓 淒涼郭景純	石小江探處 傳聞葬郭公	郭公古墓障狂瀾 碑署波心百世看 水底有天理郭璞 壁閒無句和孫魴 欲攜溫嶠犀 來照郭璞墓

談允謙	郭璞墓	止將一勺中冷泉 日薦淒涼晉代塋
孫蕙	金山	郭璞墓前增戰壘 中冷泉上沒潮痕
宋犛	金山	妙高臺上月 郭璞墓邊濠
吳雯	大風渡江問郭景純墓	世人棹舟尋不得 郭璞之墓微可識
紀映鐘	望中冷第一泉歌	裴洞花深雙碣覆 郭墳波遠片帆移
姜藻	金山覽古	蘇公橋古苔空綠 郭璞墳荒浪未平
顏枕	登金山江天一覽亭	蘇橋低落日 郭墳浴晴雲
孫鼎	金山和唐張處士韻	
施峻	郭公墓	
厲青照	謁郭公墓	
談次敏	郭公墓	
釋然修	登金山	斬王有廟疎煙冷 郭璞無墳亂石多

その流れの中で郭璞の墓も詩に詠まれるようになったと考えることができる。また、二宮論文では、墓が詠まれる詩人の条件についても言及する。それは次の四点である。

① 詩人としての評価が高いこと



②生前官途において不遇であったこと

③墓が首都から離れていること

④一族の墓地からは隔絶された墓であること

二宮氏によって示された条件を郭璞の傳記に照らし合わせると、その多くが當てはまる。郭璞は、『詩品』や『晉書』で「中興第一」と稱せられた詩人であり、卜筮で高名であったが、高位を得ることはなく、最後は「反亂は失敗する」という豫言をして、王敦に殺される。そして、その墓は今まで見てきたように江南の長江の中にあるとされているが、その眞偽のほどは定かではないので、「④一族の墓地からは隔絶された墓であること」以外は見事に合致すると言える。つまり、史傳などに記されている郭璞像は墓が詩に詠まれるのに十分な資質を持っていたのである。

しかし、その墓とされる場所については、前章で確認したように根拠が不十分であった。詩を詠む者にとって、墓の眞偽が重要であったか否かについては、後藤秋正「唐詩に詠じられた杜甫の詩」<sup>④</sup>によると、杜甫の墓は諸説ある中で有力とされる地ではなく、詩人は杜甫の墓は耒陽にあると認識して詩を作った、とされている。また、静永健「白居易は果たして『李白の墓』を訪れたか」<sup>⑤</sup>も白居易が李白の偽塚を眞墓と見なし、しかも、彼の地を訪れず詩に詠んだとしている。詩人の墓を詠む詩人は、眞偽の関係なく、ある地をその詩人の墓と假定して、その上で詩を詠むようである。このことから、杜甫や李白と同様のことが郭璞でも行われたのではないかと、容易に想像がつく。

このように、鎮江にある墓とされる塚が詩に詠まれるのにふさわしい資格を持った郭璞であるが、以下では具体的に、「郭璞墓」が詠まれた詩を見ていきたい。まずは北宋の黃庭堅である。

金山懷古

星實高岡勢若浮 星高岡に貫つ勢ひ浮るるが若し

上擎青殿寶香樓 上青殿に擎ぐ寶香樓

裴公託跡開神祕 裴公跡を託し神祕を開き

眞廟頌名紀夢遊 眞廟名を頌め夢遊を紀ぶ

東際雲航來越國 東際の雲航越國に來り

北邊煙樹認揚州 北邊の煙樹揚州を認む

笑看郭璞墳前水 笑看す郭璞墳前の水

激石淘沙幾日休 石を激し沙を淘すこと幾日ぞ休まん

この詩では、金山寺とそこから見える景色が詠まれている。そして、目に止まったのが郭璞の墓である。長江の激流が絶え間なく打ちよせる郭璞の墓を、あざけり笑いながら眺める様子が描かれている。江中にある墓に對し批判的な姿勢は見せるものの、この詩での「郭璞墓」は絶景として描かれている。このような、長江の激流の中にある郭璞の墓を、良い景色として眺めるといふ詩の内容はこの詩以降も見られる。同じく北宋の張蘊の詩は次のようなものである。

金山

江心臺殿切空雲 江心の臺殿空雲を切り

夜月魚龍影不分 夜月魚龍影分かれず

八十老僧相引説

八十の老僧 相ひ引きて説く

潮痕不上郭公墳

潮痕 郭公の墳に上らざるを

老僧に連れられてそこで見たものは、長江の浪飛沫の、その上に頭を出す郭璞の墓であった。このような波飛沫の中にそびえる郭璞の墓を絶景として眺める様子がこの詩では確認できよう。このような浪飛沫の中に切り立つ郭璞の墓、そして、その様子を絶景として眺める姿は、南宋に入っても同様であった。楊萬里の「金山行」<sup>(16)</sup>には、金山寺の様子やそこから見える景色が詠まれた後で、

最愛簷前絶竒處

最も愛す簷前絶竒の處

江心巉然景純墓

江心巉然<sup>ざんぜん</sup>たり景純の墓

とある。郭璞の墓が長江の流れの中に切り立っていて、その姿に心を奪われた様子が詠まれている。

これらの詩に見られる「郭璞墓」は長江の中にそびえる奇石であった。ここで注目したいのは金山寺とともに詠まれていることである。その金山寺はどのようなイメージで詩に詠まれていたのだろうか。

金山寺が詩に詠まれるようになった理由については樂史の『太平寰宇記』で知ることができる。そこには「上の二寺を以て、江山の勝絶と爲し、復た名人の篇什有るが故に之に編まる」とあり、金山寺と甘露寺は景勝地なので詩に詠まれるようになったと述べられている。具體的には、唐の張祐は「題潤州金山寺」にて、次のように詠んでいる。

樹影中流見　　樹影中流に見え  
鐘聲兩岸聞　　鐘聲兩岸に聞ゆ

長江の流れの中にある金山寺が縁におおわれ、そこからの鐘の音は長江の兩岸まで響き渡っていると、金山寺が長江と見事に融合している様子が詠まれている。このような、美しい景色としての金山寺のイメージは、宋以降も見られる。蘇軾の「遊金山寺」では、

微風萬傾靴文細　　微風萬傾靴文のごとく細く  
斷霞半空魚尾赤　　斷霞半空魚尾のごとく赤し

と、寺から見える美しい夕景色が詠まれている。このように金山寺は見事な景色というイメージで詠まれていたことが確認できる。これは今まで見てきた「郭璞墓」のイメージと大差がない。つまり、「郭璞墓」は金山寺のイメージの延長として詠まれていたと考えられる。「郭璞墓」の獨自性はなかったのであろうか。

#### (4) 宋末以降の「郭璞墓」を詠んだ詩について

詩中に詠まれた「郭璞墓」独自のイメージを探るには、そこに葬られているとされる「郭璞」がどのようなイメージで詩に詠まれていたのかを確認する必要がある。郭璞の墓が詩によまれた宋以前の詩において「郭璞」はどのように

詠まれていたのであろうか。『全唐詩』中で「郭璞」を詠んだ詩は五例確認できる。<sup>18</sup> その五例を分類すると「神仙・占術に通じた人物」と「文章の巧みな人物」との二つのイメージに大別できた。以下で具体的に見ていきたい。はじめは「神仙・占術に通じた人物」として詠まれた例である。杜牧は

贈朱道靈

劉根丹篆三千字

郭璞青囊兩卷書

劉根丹篆三千字

郭璞青囊兩卷書

牛渚磯南謝山北

白雲深處有巖居

牛渚磯の南謝山の北

白雲深處巖居あり

と、朱道靈を劉根や郭璞と同様に占術に通じた人物として詩に詠んでいる。つまり、この詩の郭璞は占術に通じた人物の代表例としてあげられているのである。このことは、唐代において占術で高名であったことの証明ともなる。このような神仙や占術に通じた郭璞の姿は孫元晏の詩でも確認できる。<sup>19</sup>

次に「文章の巧みな人物」である。李羣玉は「寄長沙許侍御」<sup>20</sup>で次のように詠んでいる。

未把彩毫還郭璞

未だ彩毫を把りて郭璞に還さず

乞留殘錦與丘遲

殘錦を留め丘遲に與へることを乞ふ

この詩は江淹が夢で郭璞に五色の筆を返したところ、文才が盡きたという逸話をふまえている。ここでの「郭璞」は文才の象徴である「彩毫」の持ち主、つまり、文才豊かな人物として詠まれているのである。また丘遲は、江淹が夢の中

で張景陽に錦を返したところ、江淹の文才が盡きてしまった際に、残りの錦を受け取ったとされる人物である。郭璞の筆については、次の張孜でも同様である。

句

夢破青霄春 煙霞無去塵

夢破る青霄の春 煙霞塵を去る無し

若夸郭璞五色筆 江淹卻是尋常人

若し郭璞の五色筆を夸るも 江淹卻つて是れ尋常の人

この詩でも同様に文才の象徴として郭璞の筆が詠まれている。そして、郭璞の筆が手元から離れてしまうと、それとにも文才は盡きてしまうのである。また、錢起「登覆釜山遇道人」では、

郭璞賦遊仙 郭璞 遊仙を賦す

と、郭璞が遊仙詩を作ったことが詠まれている。この詩においても郭璞が文才に優れていたことを喚起させる。

このように見てくると、唐詩において「郭璞」自身は、「神仙・占術に通じた人物」と「文章の巧みな人物」との二つの面から詠まれていたようである。いずれも超人的な能力を持った人物としての「郭璞」の姿である。ここには先ほど見てきたようなすばらしい景色としての「郭璞墓」と接点は見られない。「郭璞」は宋代以降もこの二つのイメージによって詩に詠まれ續けていく。

宋末になり「郭璞墓」のイメージはどの様に詠まれたのか見てみよう。劉克莊の「郭璞墓」には、次のように詠まれ

ている。

先生精數學

卜穴未應疎

先生數學に精し

穴を卜ふこと未だ應に疎なるべからず

因捋虎鬚死

還尋魚腹居

因りて虎鬚を捋りて死し

還て魚腹を尋ねて居る

如何師鬼谷

卻去友靈胥

如何ぞ鬼谷を師とす

卻て去りて靈胥を友とす

此理憑誰詰

人方寶葬書

此の理誰に憑りて詰らん

人方に葬書を寶とす

「郭璞墓」と題された詩で、郭璞は占いに通じていたのに、その墓はどうして今では長江の中にあるのであろうか、と郭璞の墓が江中にあることに對する疑問が詠まれている。同時に、人生のはかなさと學問や業績の永遠さも詠んでいるのである。この詩では、前章で確認したような、すばらしい景色を思わせるような記述は見られない。詠まれているのは、水の中という風水のタブーを犯した郭璞の葬地に對する疑問である。そして、そこには人の世のはかなさが漂う。郭璞は唐詩において超人的な能力を持った、いわば憧れの對象として描かれていた。その郭璞が葬られている墓に對して疑問を抱いているのである。埋葬地と密接に關わる披埋葬人物の死に對しても、すでに疑問が出されていた。詩ではないが洪邁の『容齋隨筆』では次のように記されている。

世説に「郭景純江を過ぎ、暨陽に居り、墓の水を去ること百歩に盈たず。時人以て水に近きと爲す。景純曰く、將當に陸に爲らんとす、と。今、沙漲りて墓を去ること數十里皆桑田と爲る」と。此の説は、蓋し郭を以て先知と爲すなり。世に傳ふる錦囊葬經は、郭の著はす所と爲す。山を行き宅兆を卜ふは、印して元龜爲り。然るに郭の

能く水の陸と爲るを知るも、獨だ吉を卜して以て其の非命を免がるること能はざりしか。厠上にて刀を銜ぐの見のごとく淺し。<sup>(2)</sup>

郭璞は墓の將來を知ることができても、王敦に殺されるといふ自分の未來から逃れることを占うことはできなかったであろうか、と郭璞の能力とその死への疑問が投げかけられている。劉克莊より約六十歳年長の洪邁がすでに死に對してではあるが、郭璞への疑問を示しており、そこに「郭璞墓」のイメージが變化する一つの要因を推定することができる。

劉克莊「郭璞墓」に見られた、はかないイメージが漂う「郭璞墓」の姿は、同時代の詩にも見られる。文天祥の「謀人難」では、

一片歸心似亂雲 一片の歸心亂雲に似たり

逢人時漏話三分 人に逢ひて時に漏らし三分を話す

當時若也私謀泄 時に當りて若や私謀は泄るる

春夢悠悠郭璞墳 春夢悠悠たり郭璞墳

と、はかないものの喩えである「春夢」が「郭璞墓」と同じ句に詠まれている。

先に述べたように、「郭璞」は唐詩において、超人的な能力を持った人物として描かれていた。それが人生のはかなさ、つまり、超人的な能力を持った郭璞でさえも死を避けることができなかつたという人生の嘆息と結びつくことによっ



て、「郭璞墓」にはもの悲しい、はかないイメージが與えられたと考えることができよう。このようにして、創り出された「郭璞墓」のイメージはこの後も繼承され續けるのである。元の王惲による「過郭璞墓」は次のように詠む。

青囊書祕造精深

青囊書は祕せられ精深を造す

葬法人傳冠古今

葬法人に傳はること古今に冠たり

一死祗緣撩虎尾

一死 祗だ虎尾を撩る緣り

孤墳何故葬江心

孤墳 何故に江心に葬らる

この詩では、郭璞の卜筮や相墓の術は傳えられているのに、その墓が長江の中にぽつんとあるのはどうしてなのか、と述べられている。

郭璞の墓は宋末になるとこのようなイメージで詩に詠まれていた。それに對して、他の詩人の墓はどの様に詠まれていたのだろうか。「郭璞墓」と相違點はないのか。尾形幸子「不遇な詩人を悼む——『瀛奎律隨』「傷悼類」と賈島」<sup>22</sup>は、『瀛奎律隨』「傷悼類」に特徴的に登場する賈島は、孟郊の死や墓を詠むのに、文學者の名聲よりも、不遇な實生活に目を向けて悲壯な感じを出しており、また、『瀛奎律隨』の編者方回は評語の中でそれを肯定している、としている。また、前掲の二宮俊博「詩人の墓——中晩唐期における前代の詩人評價に關して——」も、墓が詠まれる詩人達に、名も無き羣小詩人たちが、自らの境遇を、對象とする詩人の不遇に重ねて詠んだ、としている。

詩人の墓を詠んだ詩の例として、晩唐の溫庭筠の「過陳琳墓」では次のように詠む。

曾於青史見遺文 今日飄零過古墳

曾て青史に於て遺文を見る 今日飄零して古墳を過ぐ

詞客有靈應識我 霸才無主始憐君

詞客靈有れば應に我を識るべし 霸才主無くして始めて君を憐れむ

石麟埋沒藏春草 銅雀荒涼起暮雲

石麟埋沒して春草に藏れ 銅雀荒涼として暮雲起こる

莫怪臨風倍惆悵 欲將書劍學從軍

怪むこと莫れ風に臨みて倍々惆悵するを 書劍を將て從軍を學ばんと欲す

陳琳の墓を訪れ、才能を生かせなかつたことに同情し、それを自分に重ねて嘆き悲しんでいる。披埋葬者の不遇を詠むものの疑問は全く感じられない。また、北宋の蔡襄は白樂天の墓を次のように詠んでいる。

### 過白樂天墳

樂天本才士 羽儀初頡頏

樂天本より才士 羽儀初めて頡頏す

脫身避禍機 遂得林泉尚

身を脱して禍機を避け 遂に林泉の尚を得

生愛香山遊 死亦香山葬

生きては香山の遊を愛し 死しても亦た香山に葬むらる

悠悠醉吟魂 終古填幽壙

悠悠たり醉吟の魂 終古幽壙に填む

小堂松檜間 躋攀白雲上

小堂松檜の間 躋攀す白雲の上

春日照伊流 素波明演漾

春日伊流を照らし 素波明かに演漾す

草樹豈有情 一步一回望

草樹豈に情有らんや 一たび歩むごとに一たび回り望む

蔡襄は「郭璞墓」を詠んだ詩と同様に、墓のある地を訪れてその状況を詩に詠んでいる。しかし、「郭璞墓」と異なる

ところは、白樂天の墓を蔡襄が墓に詣でているのに對し、郭璞の墓を詠んだ詩は、墓を眺めているだけであるということ、そして、白樂天は自分が愛した地に葬られているということである。そこには、なぜこの地に葬られるのか、といったような疑問は微塵も感じさせない。

このように、他の詩人の墓も悲しみを込めて詩に詠むということに違いはないが、郭璞が他の詩人に對して、決定的に異なることは、單に官職の上で不遇であったばかりでなく、郭璞は未來を占いにより知ることができたのにも拘わらず、その死を避けることができなかつたという點が込められていることである。そして、他の詩人と同様に墓が都から離れているだけでなく、長江の流れの中にあるために、墓に訪れても遠くから眺めるだけで近くに行くことすらできないという状況があり、その悲壯感はさらに強まるという特徴が見られる。

こうして独自のイメージを勝ち得た「郭璞墓」は明代以降も繼承され續けるのである。程敏政の「郭璞墓」には、

落日江心墓 淒涼郭景純

落日江心の墓 淒涼たり郭景純

桑田不可測 撫掌笑山人

桑田 測かる可からず 掌を撫で山人を笑ふ

とあり、「郭景純」や「墓」を、「落日」や「淒涼」という寂しいイメージを持つことばによって修飾しているのである。また次の日本使臣中心叟によって詠まれた詩では、その悲壯感はさらに強まっている。

#### 弔郭璞墓

遺音寂寂鎖龍門

遺音 寂寂として鎖龍門に鎖ざさる

此日青囊竟不聞

此の日青囊竟に聞こえず

水底有天行日月

水底に天の日月を行らしむる天有るも

墓前無地拜兒孫

墓前に地の兒孫を拜ましむる無し

秋風野寺供生飯

秋風野寺に生飯を供へ

夜月漁燈照斷魂

夜月漁燈は斷魂を照す

我有誄歌招不返

我れに誄歌有り招くも返らず

停帆空見白鷗羣

帆を停め空しく白鷗の羣を見る

墓に詣でたはみたものの古人の遺風はさびれてしまっている。とうとう青囊には接することができなかつた。郭璞の墓の様は、兒孫が參拜に赴くことのできる場すらない。誄で弔いを詠たつても何の反應もなく、ただ白鷗たちを眺めるばかりである。詩全體がはかないイメージで覆われている。

このように宋末以降も「郭璞墓」を詠んだ詩の多くは、劉克莊によって呈示された「はかなくそびえる墓」というイメージを繼承して「郭璞墓」を詠んでいるのである。

もちろん、そのようなイメージを引き繼がない例も存在する。次に擧げる顧敬恂の詩がそれである。

### 郭璞墓

欲攜溫嶠犀

溫嶠の犀を攜へ

來照郭璞墓

來たりて郭璞の墓を照らさんと欲すれば

喚起鼉精魂　　鼉の精魂を喚起せしめ

更作長江賦　　更に長江の賦を作らん

犀の角を燃やして水中の怪物を見たという温嶠の逸話を郭璞の墓にからめて詩に詠んでいる。この詩の「郭璞」は、「鼉の精魂を喚起」させる神仙の面が見て取れ、また「長江の賦を作」という文才に秀でた姿も描かれている。いわばこの詩は唐詩に現出していた郭璞像を出るものではない。しかし、このような例は稀であり、多くの作品は學問の永續性とはかない人生との矛盾、そして、そこから喚起される寂しげなイメージとして「郭璞墓」は詩によまれている。

(5) おわりに

以上、「郭璞墓」を詠んだ詩、および「郭璞墓」と題する詩を概観してきた。その結果、次のことが明らかになった。まず、詩人の墓を詩に詠むことが多くなり、それが郭璞にも轉用されるに至って「郭璞墓」を詠む詩が創出された。それは、当初は脇にある金山寺と同様に見事な風景として詠まれていた。それが宋末になると、「長江の中に寂しくある墓」に變化した、ということである。また、他の詩人の墓を詠んだ詩と比較すると、長江の中にある郭璞の墓の姿は、参拜したくとも近寄れないという物質的條件から、より寂しさが強調されるという點も明らかになった。このことは、金山寺の附屬風景としての「郭璞墓」から、詩語としての「郭璞墓」が確立したことを意味するのである。

宋末に郭璞の墓に対するイメージが變わった原因の一つに墓と直結する郭璞の死への疑問（占術に長じた郭璞が自らの死を予測できなかったことに對する疑問）があることを指摘したが、その原因が完全に解明された譯ではない。その原因の解明を今後の課題とすることを表明して、とりあえず小論を結びたい。

- (1) 『中國文學報』第五十九冊、一九九九年。
- (2) 渡邊欣雄・三浦國雄編『風水論集』（一九九四年、凱風社）所收。
- (3) 鎮江市にある郭璞の墓の詳細な情報については、三浦國雄「風水術」（『道教の大事典』（一九九四年、新人物往來社））所收、後に『氣の中國文化―氣功・養生・風水・易』（一九九四年、創元社）に「よみがえる風水」と改題、所收）を参照。
- (4) 陸游（宋）『入蜀記』卷一に「二十八日、夙興、觀日出江中。天水皆赤、眞偉觀也。因登雄跨閣、觀二島。左曰鶴山、舊傳有栖鶴、今無有。右曰雲根島。皆特起不附山、俗謂之郭璞墓」と有る。
- (5) 『晉書』卷七十二郭璞傳に「璞以母憂去職、卜葬地於暨陽。去水百步許。人以近水爲言。璞曰、當卽爲陸矣。其後沙漲、去墓數十里皆爲桑田」と有る。
- (6) 『世說新語』術解第二十に「郭景純過江、居于暨陽、墓去水不盈百步。時人以爲近水、景純曰、將當爲陸」璞別傳曰、璞少好經術、明解卜筮。永嘉中、海內將亂、璞投織歎曰、黔黎將同異類矣。便結親暱十餘家南渡江、居于暨陽」今沙漲、去墓數十里皆爲桑田。其詩曰、北阜烈烈、巨海混混、壘壘三墳、唯母與昆。」と有り、『晉書』と異なる點は「其詩曰」以降の文が付け加えられていることである。
- (7) 續錄卷二に「郭璞精地理、凡遇吉穴、剪爪髮、以瘞之。故郭璞墓所在、多有然、不可其何據」と有る。
- (8) 『日知錄』卷三十一郭璞墓に「晉書郭璞傳、璞以母憂去職、卜葬地於暨陽。去水百步許。人以近水爲言。璞曰、當卽爲陸矣。其後沙漲、去墓數十里、皆爲桑田。王惲集乃云、金山西北大江中、流亂石間有叢薄、鴉鵲棲集、爲郭璞墓。按史文元謂去水百步許、不在大江之中。且當時旣已沙漲爲田、而暨陽在今江陰縣界。不在京口。又所葬者璞之母、而非璞也。世之所傳皆誤」と有る。
- (9) 『大清一統志』二千二百四十七册江寧府に「郭璞墓〔在上元縣北。後湖中有大墩、俗傳爲璞墓〕」と有る。
- (10) 鄭方坤『全閩詩話』卷四に「金陵後湖西南洲有郭璞墓。四周皆水浪、齧苔侵不可復辨」と有る。また、本文中で取り上げた資料の他にも、實際に訪れて記されたものとして、立石廣男「爾雅」注に關する考證の問題」（日本大學人文科學研究所『研究紀要』三十六號、一九八九年）がある。そこでは次のようである。

晉の郭璞（276〜324）、字は景純、河東（山西省）聞喜の出身である。一九八七年八月末、筆者は聞喜縣を訪ねる機會を得て、郭璞に對する知識を増やすことができた。先ずそれについての簡単な報告を以下に行っておく。

郭璞は襄社郷南郭村の人である。この村は聞喜より八㎞程であるが、坂道を登らなければならず、悪路とのよしにて、残念ながら訪ねることはできなかった。清代に建立された碑があるとのことであったが、どうやら文化大革命の時期に壊されてしまったらしい。八月初旬南京の玄武湖に郭璞の墓と伝えられている衣冠塚を尋ねた。ここにも碑はあったのに、やはり文革期に壊されたとのことで、臺石が灌木中に空しく残るだけであった。いずれも後人の建てた記念碑にすぎないとしても、歴史をしのぶ手がかりを次々と失うのは堪え難いことである。

(11) 『太平御覽』卷四十六地部十一馬鞍山に「山謙之南徐州記曰、暨陽縣北九里馬鞍山東有黃山郭璞葬所」と有る。

(12) 小論の作成に當っては、光緒三十年刊、周伯義編『京口三山志』（成文出版社影印『中國方志叢書』（一九七四年）所收）を用した。

(13) 林田愼之助博士古希記念論集『中國讀書人の政治と文學』（二〇〇二年、創文社）所收。

(14) 後藤秋正「唐詩に詠じられた杜甫の詩（上）」（北海道教育大學『語學文學』三九、二〇〇一年）、「唐詩に詠じられた杜甫の詩（下）」（『北海道教育大學紀要』五二―一、二〇〇一年）

(15) 『九州中國學會報』第三十三卷、一九九五年。のちに「白居易と「李白の墓」と改題して『白居易「風諭詩」の研究』（二〇〇〇年、勉強出版）に所收。

(16) 『誠齋集』は「題金山妙高堂題」と題す。また、全文は次の通りである。

金山未到時 羨奄有萬里之長江

金山既到了長江 不見只見千步廊

老夫平生不耐事 點檢風光難可意

老僧覺我見睫眉 引入妙高臺上嬉

不知老僧有妙手 卷舒江山在懷袖

挂上西窓方丈間 長江浮在爐煙端

長江南邊千萬山 一時飛入兩眼寒

最愛簷前絕竒處 江心巉然景純墓

僧言道許乃浪傳 龍宮特書珠貝編

初云、謝靈運愛山如愛命掇

掇取天臺鴈蕩怪石頭  
疊作假山立中流

又云、王逸少草聖入神妙

天賜瑠璃筆格玉硯屏

仍將大江作陶泓

老夫聞二說

沉吟未能決

長年抵死催上船

徘徊欲去空茫然

(17)

『太平寰宇記』卷八十九丹陽縣に「金山澤心寺在城東南揚子江。按圖經云、本名浮玉山因頭陀開山得金、故名金山寺。詩人多留題。張祜云、一宿金山頂、微茫水國分。僧歸夜船月、龍出曉堂雲。樹影中流見、鐘聲兩岸聞。因悲在朝市、終日醉醺醺。孫昉云、鳴擗妨僧夢、驚濤濺佛身。以上二寺爲江山之勝絕、復有名人篇什、故編之」と有る。

(18)

また「景純」を詠んだものは三例確認できた。褚亮「傷始平李小府正已」と孫元晏「郭璞脫襦」と清晝「講古文聯句」である。しかし、全て本文で分類した二つのイメージに當てはまる。

(19)

郭璞脫襦

吟坐因思郭景純 每言窮達似通神  
到頭分命難移改 解脫青襦與別人

(20)

三年文會許追隨 和遍南朝雜體詩  
未把彩毫還郭璞 乞留殘錦與丘遲  
竹齋琴酒歡成夢 水寺煙霞賞對誰  
今日秋風滿湘浦 祇應搔首詠瓊枝

(21)

『容齋隨筆』卷一郭璞葬地に「世說郭景純過江、居于暨陽、墓去水不盈百步。時人以爲近水。景純曰、將當爲陸。今沙漲去墓數十里皆爲桑田。此說蓋以郭爲先知也。世傳錦囊葬經、爲郭所著。行山下宅兆者、印爲元龜。然郭能知水之爲陸、獨不能卜吉以免其非命乎。廁上銜刀之見淺矣」と有る。



(22)

佐藤保『ああ哀しいかな——死と向き合う中國文學——』(二〇〇二年、汲古書院)所收。